

旧制高等学校教員時代の佐々木喜市

―立教高等学校教育の源流―

田中智子

はじめに

立教学院は一九四八年、戦後学制改革により「旧制立教中学校を二分して、新制立教中学校と新制立教高等学校を設立した」とされている⁽¹⁾。この時、立教高等学校初代主事であった佐々木喜市は「新制高等学校を旧制中学校の上屋としてでなく、むしろ旧制高等学校に近い、学問的雰囲気の中にある学校に育てたいという考え」によって、教育内容を定めていったとされている⁽²⁾。しかし、佐々木がどのような背景をもって、具体的に旧制高等学校教育のどの部分を新制立教高等学校教育に取り入れようとしたのか、未だ明らかにされていない。

佐々木喜市は一八八六年二月八日に兵庫県に生まれ、一九一〇年七月に第一高等学校文科を、一九一三年

七月に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。一九一四年まで勤務した後、大阪高等学校に教授として赴任した。その後、一九三二年に母校である第一高等学校教授となった後、戦時下の一九四三年には校長として再び大阪高等学校に赴任するなど⁽³⁾、旧制高等学校に非常に縁の深い人物である。旧制高等学校教員時代の佐々木の言動や教育方針を分析することで、発足時の立教高等学校教育の源流を探ることが可能であると考える。

そこで本稿においては、大阪高等学校・第一高等学校の卒業生の回想や寮新聞の記事にみられる佐々木の言動を分析し、それが立教高等学校の教育にどのように生かされたのか考察を試みる。

一、大阪高等学校教員時代

一九二四年、大阪高等学校（以下、大阪高校）に着任した佐々木は、「独語、心理及論理」の教授を務める傍ら、着任二年目には生徒監という役職に就いている⁽⁴⁾。生徒監とは「文部省直轄諸学校官制」によると、「校長ノ指揮ヲ承ケ専ラ生徒ノ訓育ヲ掌ル」職である（第九條）。生徒監は一九二八年の同官制の改正により生徒主事と名称を改め、「校長ノ命ヲ承ケ生徒ノ訓育ヲ掌ル」職となり、佐々木は引き続き生徒主事の職を務めた。

佐々木が生徒主事となった一九二八年頃は、全国的に左翼学生運動が盛んであった時期であり、各高等学校では生徒によるストライキや、取り締まりにあたる校長・教員の排斥運動が頻発していた。大阪高校においては一九三〇年一月、寮雑誌編集委員の生徒が特別高等警察に検挙されたのを契機に、「当面の責任者佐々木喜市生徒主事、伊藤朝生生徒主事補の辞任要求、学校当局の陳謝要求、学校より警察へ抗議提出」等の要求を掲げて三日間のストライキに入った⁽⁵⁾。また、翌三一年四月の始業式において、突如生徒大会が始まり、佐々木がその対応に追われるという一幕もあった⁽⁶⁾。

以上のように、生徒監・生徒主事として左翼学生運動の指導・取締を行う一方、一九二六年に発行された寮歌

集には、以下の序文を寄せている。

序

青年の元氣は一国の元氣なり。青年の意氣の振、不振は直接その国運の消長に關係す。青年にして修養を怠り、不健全なる思想に捉はれんか、いかでか国運の發展を図り得ん。欧米各国に於ても、ここに見る所ありて、青年運動の發展を図るに孜孜たりと聞く。実に青年の運動は刻下の一大急務に属すると謂ふべし。

然り而して我が高等学校に寄宿寮の設置せられたる亦実にこれが為ならずんばあらず。即ち切磋琢磨以て知能を啓き共同の自治以て質実剛健なる国民精神を涵養扶植せしめんが為めなり。（後略）

大正十五年三月

大阪高等学校生徒監宿舍にて

佐々木喜市⁽⁷⁾

これを見ると、やや国家主義的な側面は見受けられるが、佐々木が高校生に求めていた理想の青年像がよく表れている。不健全な思想——左翼思想を指すとみられる——に染まることなく、元氣に修養に励むことを求め、そのために寄宿寮とそこにおける自治的生活が重要であ

ることを説いている。

佐々木は当時非合法であった左翼学生運動を厳しく取り締まったようで、その実績が認められてか⁽⁸⁾、一九三二年、母校である第一高等学校に生徒主事として赴任した。

二、第一高等学校教員時代

(一) 寮生活・寮自治への考え方

佐々木は一九三二年九月、修身の教授そして生徒主事として第一高等学校（以下、一高）に着任した⁽⁹⁾。一高の寮新聞『向陵時報』には、その時の所感が以下のように記されている。

向陵健児諸君、かつてこの向陵に自治の生活を送り諸先生より親しく教へを受けし予は今や再びここに帰還し、元氣滲刺たる諸君に見え今後相互にいよいよ向陵の自治を發揚せんとす。欣快何ぞ之に過ぎん。(中略)

木下前校長は克くこゝに鑑み、寮生に客すに自治を以てし具にその意義を明にし、四綱領を論してその実行に資せられたり。何ぞその識見の高邁なるや。爾來相承けて今日に及び尚これを永恒に伝へんとし、よくその精神に則りよくそれを体现してその

実を挙げ以て天下にその範を垂れつゝあるなり。これ実に向陵の精神にして天下の等しく欽仰措かざりところなり⁽¹⁰⁾。

この引用文中に出てくる「木下前校長」とは、一高の前身である第一高等中学校の校長を務めた木下廣次のことである。木下は一八九〇年、「我校の寄宿寮を設けたる所以のものは此を以て金城鉄壁となし世間の悪風汚俗を遮断して純粹なる徳義心を養成せしむるに在り」という告示を發した⁽¹¹⁾。これは所謂「籠城主義」と呼ばれるもので、外部の弊風を遮断して自治的生活を送るよう寮生たちに求めたのであった。佐々木もまた、木下の教育方針を引き継ぎ、寮生たちに他の高校の模範となるような自治的生活を送るよう求めたのである。

(二) 運動部に対する情熱

旧制高等学校においては、運動競技も盛んであった。一高においては特に、陸運・庭球・短艇・野球の四部で競われる対三高戦は全校を挙げての大きな行事となっていた。一九三四年、一高は対三高戦において、創始以来初めての四部全勝を果たした。その際、佐々木は『向陵時報』に以下の文章を寄せている。

昭和九年八月十九日野球戦の終るや西京極の祝勝会において私は子供のやうに無心に踊り狂った。太鼓をも打ち叩いた。更に応援団本部の前においては小躯敢て大幟を振り翻へしてまで熱狂した。恐らくこれは生涯において始めての出来事であらう。実に私はそれ程嬉しかった¹²⁾。

以上のように、対三高戦の勝利に対し、佐々木は「生涯において始めての出来事」であるというくらい狂喜乱舞している様子が描かれている。佐々木の情熱は対三高戦の中心となる運動部に対しても向けられており、一九三九年、運動部屋（寄宿寮内に同一の運動部所属の生徒だけで構成される部屋）の存続問題が議論されたのに際し、以下のような持論を展開し、運動部屋存続を主張したとされている。

吾々の生活はかりそめの生活ではない。カーライルがいったやうにローソクの灯同様照らして燃え尽きてゆく生活なのだ。この点に於て運動部の部屋には真剣な生活、精進の生活が行はれてゐる。部の部屋以外には、中心となるべき生活はない。今の状態では部の生活にのみ意義があるものと思ふ¹³⁾。

(三)「真剣な生活」の提唱

前掲引用文にある通り、佐々木は「真剣な生活」という言葉をたびたび口にしてゐる。日中戦争開戦後の一九三七年第二学期の晩餐会においては、「例のはちぎれさうな元氣一杯のかんばせを輝かせ乍ら」、「この重大時局に際して、我々一高生の生活はどうあらねばならぬか。真剣な生活こそ、我々凡てに課せられてゐるのだ」という一点を強調して降壇したとされる¹⁴⁾。

また一九三八年四月、「近年出席状況不良ノ者少カラザルハ甚ダ遺憾ナリ」との掲示がなされると、『向陵時報』紙上に以下のようなコメントを寄せてゐる。

あ、いふ掲示の出ることが既に遺憾なのであるが、自治をやつてゐる上からいつてもこのことは恥辱である。欠席といつても事情止むを得ないものは問はないが常習的に休む様になると困る。クラスや室のものもいくら注意してもきかないからと放つて置かないでもつと友情をすゝめて尚相当の刺激を与へても引張つてゆかねばならぬ。休む理由は今の寮には生活の中心とか希望や理想が欠けてゐるのではないか。それは自己省察の不足から来るのではなからうか。自分が一高に入つて何を為すべきや、如何に身を処するやを考へたら自ら方針もきまつて来るだら

うと思ふ。批判とか合理的とかいふことをあつていては目的は得られない。もつと真剣な生活をしてゆかなければ方向が定まつてこないのではないかと思ふ⁴³⁾。

佐々木が一高生徒主事であつた一九三〇年代半ばは、左翼学生運動が収束し、戦時下へと向かう途上の時期で、高校生たちの間にも退廃的な気分が広まつていた。佐々木が繰り返し「真剣な生活」を提唱したのは、彼の性格もあるだろうが、こゝういつた時代背景も影響しているのではないだろうか。

(四) 佐々木喜市から佐々木順三へ

一九三八年四月、佐々木喜市は長年務めた生徒主事を退任した。後任の生徒主事となつたのは、後に立教大学総長となる佐々木順三である。当月開催された新入生歓迎茶話会の席上、新旧佐々木生徒主事の挨拶があつた。その様子は以下の通りである。

旧佐々木主事は新佐々木主事を紹介された。「佐^{ママ}木順三先生は、私の一年後輩で六高、八高、静高に教授として在任されたので、私が今回身体の都合で閑職に着きたく思ひ、後任に推薦したのでありますが、私はあまり良いお母さんで無かつたのですが、

今度の佐々木先生は屹度良いお母さんになられると思ひます」と。

新佐々木主事はその次に立たれ、「この前の佐々木先生は、身体がお疲れになつてお止めになりましたが、私はまあ大きな身丈が取柄です。生徒主事は寮のお母さんといひますが、悪いお母さんでも皆さんは偉くなつて下さい。(後略)」⁴⁴⁾

引用文中に見られるように、佐々木順三は佐々木喜市の一高および東京帝大の一年後輩であり、彼の推薦を受けて後任の生徒主事となつた。これが戦後の立教高等学校主事時代まで続く縁となる。

文中、「お母さん」という言葉が頻出してゐるが、佐々木喜市の一高教員時代の愛称は“Mother”（ドイツ語で母という意味）であつた。佐々木はその愛称に相應しく非常に面倒見の良い教員であつたようである。文科から理科へ転入しようとしている生徒の相談に応じたり⁴⁵⁾、生活に困窮した生徒にアルバイトや奨学金を斡旋したりするなどのエピソード⁴⁶⁾が残つてゐる。

生徒主事を退任した佐々木は一九四一年、大阪高校に校長として赴任することになり、一高を去ることになつた。同年四月に開かれた全寮茶話会で、佐々木は次のような挨拶を残している。

「多くの留学生を交へて、此のなごやかな晩餐会を嬉しく思ひます。さて今の現状を見る時諸君は大なる使命を負はされてゐると思ひます。自分の地位と責任とを思つて互に磨き合つて行くのこそ君達の寮生活と思ひます。皆さん頑張つて下さい。さて此度大阪の方へ転任することになりましたが、私自身にとっては何時までも向陵に居たい気持です。然し何時までもさう我儘は言へないと思ひ、又嘗て私は大高の生徒主事等をしたことがある関係上、此の度の転任を快諾致した次第です。又先程は多くの寮生から多くの激励の言葉を戴いたり、給仕の諸君からも沢山の手紙を受取りまして、ほんとうに嬉しく思ひます。さて私は母ムツケと言われてゐるさうですが、私が何か仕事をするのも子を光らす為のものでなければならぬと思ひます」

「さて一言して置きたいことは我々は飽まで真剣でならねばならないことです。運動会にも、或はサボつて本を読むにしても、それが真剣なものなら良いと思ひます。理屈のみでは不可ない、それを越えたものがなくてはならないと思ひます」⁽¹⁹⁾

最後の挨拶でも佐々木らしく「真剣な生活」を提唱

し、九年勤めた一高を離れ、再び大阪高校へと戻つていった。

三、大阪高等学校校長時代

佐々木が大阪高校に戻つた一九四一年はすでに戦時下であり、校長として戦時体制に対応することを余儀なくされた。最初に大きな対応を迫られたのは、同年一月八日の日米開戦時である。この日佐々木は全校生徒を講堂に集め、壇上から東方を遙拝している。そしてこの直後から、生徒に対し常時教練服とゲートル着用を命じるとともに、自らも「国民服に戦闘帽で終始し、勤労作業などでは先頭に立つて垂範した」⁽²⁰⁾ そうである。しかし、翌四二年二月にシンガポールが陥落したのを機に、生徒の教練服・ゲートル着用を解除している。大阪高校二〇回生の井手経三は当時の佐々木について、「思うに彼は、このような服装を生徒たちに強いることを本心では甚だ嫌つていたのであるまいか」と回想している⁽²¹⁾。

一九四三年に入ると、修業年限短縮により前年一月に卒業した三年生のうち、徴兵年齢に達した二名の生徒が入隊することになり、全校を挙げての壮行会が開かれた。そこで「国民服にゲートルをまいた佐々木喜市校長が声高らかに、お国の為に戦える二人の名誉を称えた」

そうである²²⁾。

さらに同年には、生徒の部活動に対して軍部から圧力が加えられるようになった。野球部に所属していた二一回生の清水幸義の回想によると「まず対外試合を禁止され、やがて野球部そのものが解散を勧告されるようになる」²³⁾、「軍需生産に必要な物資を消費しすぎるとともに理由で、バレーボールやバスケットボールなどとともに九月のはじめになって強制的に廃止されてしまった」²⁴⁾そうである²⁵⁾。一高教員時代、運動部に対しひとかどの情熱を燃やしていた佐々木はこの時、軍部の圧迫に対し「敢然、その椅子を蹴られた」と言われている²⁶⁾。

この頃には大阪高校でも「語学の時間が目にみえてへり、教練の時間が目に見えて増し」、「工場や飛行場へ勤労動員される日が多いに多くなつ」²⁷⁾ていった。そして、「諸君は口を開けばよく、やるべき時が来ればいわれなくてもやるという。しかし今こそもうそのやるべき時なんだ」と佐々木校長が悲壮な調子で「兵役を志願するよう諭すようになったという²⁸⁾。

そのような中、同年九月、佐々木は校長に就任してわずか二年余りで突如辞職し、帰京した。この時、佐々木順三が辞職の理由を尋ねると、「教育が行なわれない学校は意味がないと、失望と憤りの言葉を漏らして」いた²⁹⁾そうである³⁰⁾。学徙動員や学徙出陣、さらに軍部の介入

によって教育が行えない状況に耐えかねての辞職だったのではないだろうか。

こうして大阪高校校長を辞任した佐々木は翌一九四四年、満州国国立女子師道大学学長を務め、敗戦を迎えた。戦後は東京高等学校講師を務める傍ら、佐々木順三に請われて再び立教大学で教鞭をとった³¹⁾。そして一九四八年に立教高等学校が開校すると、その初代主事に就任したのである。

四、立教高等学校主事として

(一) 旧制高等学校から新制高等学校への継承

立教高等学校（以下、立教高校）発足を目前に控えた一九四八年三月、佐々木は『立教新聞』に以下の文章を寄稿している。ここに佐々木の旧制・新制高等学校に対する考え方がよく表れているので、少々長くなるがほぼ全文を引用する。

今年が高専最後の生徒募集というので、どの高校も真に空前絶後の応募者で入学の門は極めて狭いようである。これから観ても高校が今尚いかに青年学徙のあこがれのであるかがわかり、高校の存在意義がいかに深いものであるかがうかがわれる。由来高

校生は人格の完成を期し、読まざるを得ざるが為に読み耽り、語らざるを得ざるが為に語りあかし、思はざるを得ざるが為に思いつくしてはキリストにはしり、釈尊にひざまづいた。かかるところから或は犬儒の如き生活に或は修道者の如き生活に入ったのであつて、かの亜流の奇を好み新を銜うが如きものと共に論ぜらるべきでないことは、恰かも今は頭髮を前に後に右に左に撫で分けて居る学生が学生の真相でないのと同じい。このひたむきに真理を探り道を求めんとする生活の間にかくに深きものが、いかに高きものが、そしていかに聖きものが生れて来たことであらう。

私は曾て一高在任中幾度かこれらのことを如実に体験した。勿論一高は全寮制によるからでもあらうが、寮総代会に於て寮又は学校に関する重要な議案が審議せられる際の如き、日常いかに親しい友達であつても寮の為の学校の為めにはその非をあげて憚るところなく而かもそれによつて益々心の親しみを増すのである。一かどの理智に目覚めたものがその理智をたのむことなく謙虚に友と語り合い師を敬い慕うて教をうける専ら捨我精進帰依隨順の生活をなすのである。これこそ自ら治めて自ら治まる自治の真髓であつて、高潔な風格が養われ、輝しい伝統が

興る所以である。そしてこれはこれ正にいつの時代に於ても変ることのない又忘れられてならないものと信ずる。私は古い伝統のある高校が新制高校として残存し広くその範を垂れんことを堅むと共に、新しく出来る高校も少くともこの一面をとり入れられんことをこいねがうものである⁸⁸。

以上を見ると、佐々木は旧制高等学校の伝統のうち、寮生活を中心とした自治的生活や人格形成の部分を、新しく出来る立教高校に取り入れたいと考えていたようである。また、初代校長となつた佐々木順三も、後年以下のように語っている。

高校生であるといふことは、曾ての日本の青年にとつては、非常な名譽であり、誇りであつたのである。彼等は、大体に於て、友情に厚く、学問を好み、真理に忠実な学生であると思はれてゐたからである。新学制の中に再び高等学校といふ名称の学校が置かれたのは、恐らく昔の高等学校の善さを幾分でも此処に残し度いといふ先輩の思いやりからではあるまいか。私はさうした見地から、一般の新制高校に物足らなさを感じるものである。然し我が立教高校に於ては、この名称が連想させる昔の高校の善

さを、幾らか打出すことが出来ると思っているのである。昔の高校の善さは、前にも述べた様に、上級学校の入学試験や就職を目的とした目先の勉強をしない事から来てゐるのである。幸にして立教高校の学生の大部分は、立教大学に進むことが約束されて居り、又就職目当てに勉強してゐるものも無い様である。この立教高校の環境に於てこそ、旧高校の誇りであつた友情、学問、真理といふやうな美しい実が、大いに結ぶものと信じてゐるのである²⁹⁾。

以上を見ると、佐々木順三は旧制高等学校の特徴である友情・学問・真理を新制高等学校に継承させたいと考えており、上級学校への入試を考えなくてもよい立教高校であればそれが実現可能であると考へていたようである。初代校長・主事の以上のような考へをもとに、立教高校のカリキュラムは構築されていったのである。

(二) カリキュラムの特徴

次に、立教高校のカリキュラムについて見ていきたい。一九四八年の開校当時のカリキュラム(表1)と、「新制高等学校の教科課程に関する件」(一九四七年四月七日発学第一五六号、文部省学校教育局長各地方長官宛)の通達に示された新制高等学校発足時のカリキュラ

表1 立教高等学校カリキュラム(1948年)²⁹⁾

教科	科目(単位数)	必修/選択
国語	国語(15) 漢文、書道(芸術参照)	必修15
社会	一般社会(5) 国史、世界史、人文地理、 時事問題(各5)	必修5 選択10以上
数学	解析(一)、解析(二)、 幾何(各5)	選択10以上
理科	物理、化学、生物、地学 (各5)	選択10以上
保健体育	体育(9)	必修9
外国語	英語(15) 独語、仏語(各6)	必修10、選択5 選択6
芸術	漢文、書道、図画、音楽、 工作(各6)	選択12以上
宗教教養	教養(6)	必修6

ム(表2)を比較すると、以下の通りである。

表2 新制高等学校発足時のカリキュラム⁽³¹⁾

教科	科目 (単位数)	必修/選択
国語	国語 (15)	必修 9
書道	書道 (6)	選択
漢文	漢文 (6)	選択
社会	一般社会 (5) 東洋史、西洋史、人文地理、 時時問題 (各 5)	必修 5 選択
数学	解析学 1、幾何学、解析学 2 (各 5)	選択
理科	物理、化学、生物、地学 (各 5)	選択
体育	体育 (9)	必修 9
音楽	音楽 (6)	選択
図画	図画 (6)	選択
工作	工作 (6)	選択
外国語	外国語 (15)	選択
実業	農業、工業、商業、水産、 家庭 (計 40)	選択

表1と表2を比較すると、主要教科のうち国語・社会・数学・理科と、書道・漢文・音楽・図画・工作については、単位数など概ね通達に沿ったものとなっているが、大きく異なるのは以下の二点である。

第一に、当時新制高等学校では選択教科であった外国

語が必修となっており、単位数も選択と合わせて二二単位と多いことである。しかもその内容が、英語（必修一〇単位/選択五単位）、および独語または仏語（選択六単位）と決められていることである。第二に、通達の教科一覧にはない「宗教教養」が六単位必修となっていることである。

この二点に関して、佐々木が教員を務めていた頃の一高の学科課程（表3）とも比較して見てみよう。まず外国語について、旧制高等学校は大学予備教育機関でもあったため、他の教科に比して時間数が多くなっていた。一高では学則により、「外国語ハ英語、独語又ハ仏語トシ」、文科・理科甲類は英語を、文科・理科乙類は独語を、文科丙類は仏語をそれぞれ第一外国語とすることが定められていた⁽³²⁾。佐々木は旧制高等学校教育の中心であった外国語教育、しかも英語のみならず独語や仏語も、立教高校の教育に取り入れたのである。

次に教養について、表1では「宗教教養」となっているが、「内容は哲学」であり、表には記載されていないものの、社会科学の中に心理学の授業もあったという⁽³³⁾。前述の通り、佐々木は大阪高校では「独語、心理及論理」を、一高では修身を担当していたこともあり、新制高等学校では廃止されてしまったこれらの科目を、立教高校のカリキュラムに採用したのではないだろうか⁽³⁴⁾。

表3 第一高等学校学科課程⁸³⁾

学科目	毎週の教授時数 ※ () 内は選択					
	第一学年		第二学年		第三学年	
	文科	理科	文科	理科	文科	理科
修身	1	1	1	1	1	1
国語及漢文	6	4	5	2	5	
第一外国語	9	8	8	6	8	6
第二外国語	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)
歴史	3		5		4	
地理	2					
哲学概説					3	
心理及論理			2		2	
心理				2		
法制及経済		2	2		2	
数学	3	4		4		4 (2)
物理				3		5
化学				3		5
自然科学	2		3			
植物及動物		2		2		4 (2)
鉱物及地質		2				
図画		2		2		(2)
体操	3	3	3	3	3	3

(三) 学友会と生徒自治
 佐々木はまた、課外活動にも力を入れ、学友会を組織した。その目的等について、後年以下のように回想している。

生徒には生徒心得を示し、その機関として学友会を組織し、部長委員長制として、課外に専ら自治的に生徒の体質趣味に応じ、体育会文化会の何れかに参加し、その団体生活の訓練によって自主協同の精神を養い、社会の形成者としての人格完成の契機たらしめた。⁸⁴⁾

以上を見ると、佐々木は学友会の活動を自治的に行わせることで、自主協同の精神を養いたいと考えていたようである。これについて、当時教務部長であった小木鐵彦も以下のように回想している。

正規の授業以外の生徒の諸活動は、学友会が取扱う事としたのである。生徒の学校生活の規範とすべき生徒心得、学友会組織等は主事を中心に教職員会の議を経て決定し施行したものであるが、校章、校旗、校歌等の選定は、高校教職員、生徒全員から募集し、検討の上選定されたものである。⁸⁵⁾

以上のように佐々木は、正課外の生徒の活動は、学友会を中心に生徒の自治によって行わせようとしていた。前述のように佐々木は、旧制高等学校の寮生活を中心とした自治的生活を立教高校の教育に取り入れたいと考えていた。開校当初の立教高校には寮がなかったため、寮自治は実現できなかったが、その分学友会活動の中で生徒自治を実現しようとしていたと考えられる。

また、佐々木は体育会の部活動にも熱心であり、「毎年、夏の野球大会には必ず自らグラウンドに立って選手を激励される」ほどであったという⁸⁸⁾。

おわりに

以上、旧制高等学校教員時代の佐々木喜市と、佐々木が中心となって構築した立教高校の教育内容について述べてきた。以下、①旧制高等学校教員時代の佐々木の教育方針の特徴、②旧制高等学校教育のうち、立教高校の教育に継承されたものの、二点について考察を試みる。

まず①について、佐々木は大阪高校教員時代には左翼学生運動を厳しく取り締まり、校長として戻った後は、戦時体制という難しい局面に対応した。一方で、一高教員時代にはその狭間の時期であったこともあってか、非

常に面倒見のよい生徒主事であったようである。このため、教え子たちの間でも「生徒にたいする厳しい姿勢と『一高でムッター(母)と呼ばれた』と自称する慈愛とが兼備され、評判は分かれる」ようである⁸⁹⁾。

生徒たちの教育にあたっては、「真剣な生活」を提唱するなど熱心に取り組み、運動部の活動にも情熱を傾けていた。この面については、立教高校主事時代も変わらなかったようである。

次に②について、カリキュラムの面から見ると、外国語の時間数が多く、しかも英語のみならず独語・仏語教育も導入している。また、一般的な新制高等学校には存在しない教養の授業を設け、旧制高等学校のような語学と教養中心の教育を目指したと考えられる。

佐々木は一九五二年、定年退職によって立教高校を去り、佐々木らが構築したカリキュラムも、学習指導要領の変遷等により、一九五六年には独語・仏語は選択二単位に縮小され、教養の授業も「宗教(聖書)」へと変わった⁹⁰⁾。しかしながら、立教高校を「旧制高等学校に近い、学問的雰囲気の中にある学校に育てたいという考え」は二代目主事の縣康に引き継がれ、佐々木が実現できなかった校地移転や寮の建設を実現させていくのである⁹¹⁾。

註

- (1) 立教高等学校50年誌編纂委員会編『立教高等学校50年誌』（立教高等学校、一九九九年）六頁。
- (2) 縣康『神に生き教育に生き―立教と共に六〇年―』（聖公会出版、一九九三年）一三一頁。
- (3) 「パウロ佐々木喜市葬送式順序」（一九六六年六月二六日）掲載の略歴を参照。
- (4) 『大阪高等学校一覽』自大正一四年四月至大正十五年三月、七一頁。
- (5) 「ストライキ事件」（大阪高等学校同窓会『大高…それ青春の三春秋』一九六七年）一四一―一五頁。
- (6) 「我々のクラスは、昭和六年に入学した。入学式の翌日が始業式であったが、校長の訓辞が済んで、先生方がぞろぞろと退出しかけた時、生徒が「佐々木先生」と叫びながら走り出てきた。生徒主事の佐々木先生が一寸振返ったのと「学生消費組合について今までの交渉経過を説明します……」という言葉に続いて流れるような調子の演説を始めたのと殆んど同時であった。佐々木先生があたふたと何か制止されたようだが、その時はすでに演説は調子にのって止めようがない」（中山信正『昭和六年4月のこと』『大高…それ青春の三春秋』二二八頁）。
- (7) 大阪高等学校同窓会『新・大高寮歌集』一九九六年、四頁。なお、この序はその後、寮歌集が改訂されても受け継がれた。
- (8) 一九三六年に「高を卒業した福井良盈の回想によると、佐々木「生徒主事は大阪の高校で一挙に二十人を退学させるといふ辣腕を認められて赴任して来たということだった」と噂されていたようである。（昭11一高会編『惜春賦 卒業50年』一九八八年、二四九頁）。
- (9) 『第一高等学校一覽』自昭和七年至昭和八年、一四二頁。
- (10) 佐々木喜市「向陵に帰る」（『向陵時報』第三七号、一九三三年九月一六日）。
- (11) 第一高等学校寄宿寮『向陵誌』一九一三年、二頁。
- (12) 佐々木喜市「四部全勝を祝す」（『向陵時報』第六一号、一九三四年九月二〇日）。
- (13) 「今ぞ！再びめぐる復仇の対三高戦」（『向陵時報』第一二六号、一九三九年六月二六日）。
- (14) 「感激か、批判か―向陵の時局認識如何―第二学期晚餐会―」（『向陵時報』第一〇二号、一九三七年二月一五日）。
- (15) 「自肅精勤 心を引締めよ向陵の若人」（『向陵時報』第一〇七号、一九三八年五月一六日）。
- (16) 「新しき友を迎へて嚶鳴堂の茶話会」（『向陵時報』第一〇六号、一九三八年四月三〇日）。
- (17) 一九四〇年卒の坂本祐一の回想によると、「自分の進路についてひそかに思い悩んでも、誰に相談したらよいか分らない。意を決して西荻窪の佐々木喜市先生の門を叩いた。（中略）佐々木先生の話では、一高は大阪高校と違って転科は認めず、改めて入試を受け直さなければならぬということだった。そして私の性向についてよく調べておくから、一週間たってまた来なさい、ということだった。先生はその間に私の中学校の内申書、一高入試の成績、それに一高における学業の状況」などを調べ上げたうえで、進路について助言を行ったそうである。（昭和15年一高会編『弥生道 一高卒業50周年記念文集』一九九〇年、二二八頁）。
- (18) 一九三八年卒の杉浦孝明の回想によると、「生活に行き詰まり「退学届を出した行ったが、S生徒主事は、日赤病院のK博士を紹介し、その家庭教師のアルバイトによって無事に卒業することができたということである（昭和十三年一高会『新懇 第一高等学校卒業半世紀記念文集』一九九二年、一四〇頁）。

- (19) 「名残を惜しむ我がムッター 佐々木喜市先生大阪高校長へ」(『向
 陵時報』第一三三三号、一九四二年五月一〇日)。
- (20) 大阪高等学校同窓会『旧制大阪高等学校史』一九九一年、七八〜八
 七頁。
- (21) 前掲『大高・それ青春の三春秋』一七二頁。
- (22) 清水幸義『学徒出陣』(昭和戦争文学全集11『戦時下のハイティ
 ー』集英社、一九六五年)三三八頁。
- (23) 前掲『学徒出陣』三三六頁。
- (24) 「先生の横顔―佐々木喜市先生―」(『立教新聞』第二二二号、一九四
 九年九月二二日)。
- (25) 前掲『学徒出陣』三四〇頁。
- (26) 佐々木順三「佐々木喜市君の思い出」(季刊『立教』第四二二号、一
 九六六年一〇月)二七頁。
- (27) 「やがて悪夢のような戦争が終って、全てのものが再出発する時が
 来た。私は計らずも立教でその衝に当ることとなった。色々の面で喜
 市君の助けを借り度いと思つて同君に交渉したところ、数日熟考の後
 承諾の返事をくれたが、その時の言葉は今もハッキリ覚えて居る『僕
 は立教で教育者の第一歩を踏み出した者だから、晩年再び立教に帰つ
 て教育者の最後の奉仕をなすことの出来るのを光栄と思う』というの
 であった(前掲「佐々木喜市君の思い出」二七〜二八頁)。
- (28) 佐々木喜市「新制高校の発足に際して」(『立教新聞』第二二二号、一九
 四八年三月一五日付)。
- (29) 佐々木順三「創立十周年を迎えて」(立教高等学校『創立十年誌』
 笠井出版、一九五八年)一五頁。
- (30) 前掲『立教高等学校50年誌』五三頁掲載の kari キュラム表をもとに
 作成。
- (31) 「新制高等学校の教科課程に関する件」(一九四七年四月七日発学第
 一五六号、文部省学校教育局長各地方長官宛) 所載の課程表をもとに
 作成。
- (32) 「第一高等学校学則」第一款第一条。
- (33) 「創立期には、旧制高校の印象が背景にあり、3年次には心理学
 (社会)や科学史(理科)、各学年には教養(内容は哲学)、2・3年
 次に第二外国語として独語・仏語の必修選択がおかれるという、大部
 分の生徒が立教大学進学を前提とした、比較的程度の高い内容の授業
 が考えられていた」(前掲『立教高等学校50年誌』五二頁)。
- (34) なお、佐々木は開校当時の立教高校において、教養と独語の授業を
 担当している(前掲『立教高等学校50年誌』二四頁)。
- (35) 「高等学校規程」(一九一九年三月文部省令第八号) 第一九条・二〇
 条所載の学科課程表をもとに作成。
- (36) 佐々木喜市「立教高等学校十年の歩み」(前掲『創立十年誌』) 四頁。
 小木鐵彦『愛行』(日本聖公会出版事業部、一九六九年) 四七〇〜
 四七一頁。
- (37) 前掲「先生の横顔―佐々木喜市先生―」。
- (38) 前掲『旧制大阪高等学校史』八七頁。
- (39) 前掲『立教高等学校50年誌』五三頁。
- (40) 縣はその著書『神に生き教育に生き―立教と共に六〇年―』の中
 で、「主事として私がまず手掛けるべきことは、前任者の意図を継い
 で教育内容を充実し、同時に、広い校地を取得し、校舎を建てること
 であった」(二三四頁)、「私の前任者、佐々木喜市氏は、この学校を
 旧制高校のように程度の高い学校にしたいと考えておられたのである
 が、勿論それも一つの理想であった。私はこのような構想の下に先ず
 寮制度を実施してみようと考えた」(二六二頁)と回想している。